

The First
Glocal
Magazine

Tokion

トキオン・ジャパン

7
no.60
550yen

GLOCAL SPOT

パレ・ド・トーキョー／パリ
必見のアートセンター、
徹底取材!

Interview

カーラ・ブルーニ
スーパーモデルのソングブック

Mode

ジョン ローレンス サリバン
ジャケットにこめた美学

TOKION USA

ニュー Yorker が見た
“森山大道”

ALL about HIROSHI FUJIWARA

藤原ヒロシのすべて

TOKION

The Palais

site for the contemporary arts

パレ・ド・トーキョー
いまのアートのかたちを創る

Text_YUKA TOKUYAMA



[Tatiana Trouw, Double Bind] 01 FEB-11 MAR 07



[MUSIC FOR PLANTS, A project by Peter Collin]
01 FEB-11 MAR 07



[GROW YOUR OWN,
A project by Peter Collin]
01 FEB-06 MAY 07

パレ・ド・トーキョーは美術館ではなく「現代創造サイト」というその名にはアートすら見当たらない。美術館ではないのはコレクションを持たないため、敢えてアートセンターと名乗らないのは実験的な表現を可能にする、いわばアーティストの創作の場、そして出会いの場としてありたいという開館当初からの意図である。こうした意図をもたらし続けた契機を探るなら、ここでパリの現代美術事情を素早く俯瞰する必要があるだろう。

たとえば昨年再開したパレに隣接するパリ市立近代美術館では、評価の安定した作家（ピエール・ユイグ、ドミニク・ゴンザレス・フォレストル、さらにフィッシュリ&ヴァイス）の個展等に加えて、コレクションでも20世紀初頭パリに始まり現代の作家による最近年の新作まで網羅し、着実に近代以降のヨーロッパ美術の歴史を紡いでいくという美術館の意志が見てとれる。今年開館30年を迎えるボンビドゥ・センターでは、コレクション展や大規模なテーマ展はもちろんのこと、

今活躍中の中堅作家の新作を紹介、さらにシネマや演劇、ダンスとまさに充実したプログラムだが、規模が大きすぎるため館全体のディレクションは見えづらい。カルティエ現代美術財団では、日本人作家では東草や横尾忠則、あるいは映画監督デヴィッド・リンチのデッサンやペインティングを紹介するなど、こここのところ個展のシリーズが目立つが、内容によっては大味なことも。近年目が離せないのは、バスチーユのメゾン・ルージュ。質の高い個人コレクションの紹介とヘンリー・ダーガーや工藤哲巳など個性的な選択の展覧会で際立っている。この他にもルーヴルやオルセーなどでも現代美術作家によるコレクション展示などがみられる。

ところがこれらはいずれも、プログラムの内容によって多少の差はあるにしても、完成した美術作品の鑑賞の場という、しいていえば一定の距離を置いて「見る」、静的な美術館的空間である。これに対してパレ・ド・トーキョーでは、むしろこうしたアートの閉鎖的

なイメージを打ち破るべく、サブカルチャーに親しんだ若者や小さな子どものいる家族連れも惹きつける様々な要素を取り入れた「創造の場」となることが望まれたわけである。そこでパレは、観客体験・参加型作品、ワーク・イン・プログレスな作品に加えてこうした展示からバーやレストランまで地続きの開放的な空間、DJやファッションイベント、さらに連日夜12時まで開館などの“非”美術館的要素で、ある種トレンド的なプレイランド、アート系クラブのような様相を帯びてきた。開館から5年、一方でカオス的ともいわれたこうした開放的な方向性を引き継ぎつつも、昨年から着任したディレクター、マーク・オリヴィエ・ワレーによって、パレでは新しいディレクションが打ち出されている。

アートそのものの意味を問い「日常的なものがアートに変貌する」可能性に魅力を感じるというマーク・オリヴィエは、アート界のみにとどまらず、科学やス

Tokyo,

パレ・ド・トーキョー
Palais de Tokyo
13, av. du Président Wilson 75016
Paris
Tel +33 1 47 23 38 86
12:00 ~ 0:00 月曜休館
アクセス
Metro : Iéna or Alma-Marceau
stations (line 9)
RER C : Pont de l'Alma station
Buses : 32, 42, 63, 72, 80, 92



Michael Blazy, Post-Painterly 01 FEB-06 MAY 07

スポーツ、雑学等、あらゆる分野からの刺激を通してアートを捉えなおしたいという。例えば昨年9月の展覧会オープニングイベントの木こりによる木彫コンテストやミニバイク・モーターショーに始まり、降雪術と催眠術とアート、量子力学、幻覚作用のあるサボテン…等々のコンフェランスの題目をみるだけでも、いわゆる現代美術の枠組みのなかだけで思考するのではなく、身のまわりをとりまくものへ興味と直観から展開する発見と経験のなかからアートを探求しようとする態度が見てとれる。

ところで日常文化といえ、昨年パレ・ド・トーキョーのセーヌ川対岸にオープンしたケ・ブランリー美術館。近世以降フランスが非ヨーロッパ文化圏から集めてきた数々の日用品オブジェ群の魅力には時を忘れて眼を奪われる。とはいえ、ジャン・ヌーヴェル設計の青々と繁る植栽とアースカラーの建築によって熱帯林を想起させるブランリーには、少なからず植民地

主義的な視線が垣間見え、やはり居心地悪さを感じるのに対して、パレでは、異質な要素を他者として隔てることなく取り入れ、共有することによって現在の創造の糧にしようとする態度がいかにも心地よい。

振り返ってみれば、こうした西洋美術の伝統から離れたところにインスピレーションを求める態度は、20世紀初頭パリに花開いたアヴァンギャルドのそれとわけて親しい。マルセル・デュシャン、マン・レイ、アンドレ・ブルトンといったダダやシュールレアリスムのアーティスト達は、ファウンド・オブジェ、無意識の開拓、科学・機械美への傾倒等に見られるように、日常のなかからアートへの飛躍を見出した。とはいえパレでのマーク・オリヴィエの試みは、とくに歴史に源泉を求めているわけではなく、またいまの創造を歴史化する行為でもなく、むしろ歴史にシンクロする行為と見てとれるだろう。

アートと日常性とのコラボレーションとでもぼう

が、日常性、凡庸なもの、雑多なものが新しい創造への刺激となり、歴史と共振することによって、作品、展覧会、パレ全体のプログラムの解釈の幅を広げて、深みを与える。それは決して、アートを親しみやすく・分かり易く見せるためではなく、むしろいくつもの筋を束ね絡めて複雑化することによって、アートの力を増幅させる行為である。

パレ・ド・トーキョーが、パリにあってコンテンポラリーアートの殿堂ではなく、開放的な創造の場としてあることは、実は観客である我々も「いま」の創造に加担しているという密かな喜びを味わえるスリリングな場所としてあることを示唆している。パリに着いてカフェで一息ついたあと、いまここで何が起きているか、ここでなにが創られようとしているのか、この眼で確かめ、肌で感じるには、複眼的に、織物の綾を織り込むように、アートとあなたの身のまわりを見渡すといいだろう。

パレ・ド・トーキョー改修計画

パレ・ド・トーキョーは、1937年に開催されたパリ万国博覧会の会場として建設された。その後様々な用途に転用されながらも近年ではがらんとした箱となっていた建物は、1999年に行われた設計競技の結果、フランスの建築家アンヌ・ラカトンとジャン＝フィリップ・ヴァッサルの手によって、2002年、コンテンポラリー・アートのための美術館として再生された。まるで倉庫か工場を思わせるコンクリートの床、粗く塗装された壁、剥き出しの鉄骨、設備のダクトが天井を交差する大空間は、現在、「現代的創造活動の場」として広く開かれた場所となっている。

設計者にとって、簡潔で明快な設計をするということは、実はとても難しく手間のかかる作業だ。特に様々なプログラムが要求される美術館建築においては尚更のことである。しかし、ラカトン&ヴァッサルは、パレ・ド・トーキョーの改修計画においてそれを見事に実現している。パレ・ド・トーキョーには、例えばカルティエ現代美術財団のような洗練された繊細さや、昨年6月のオープン以来連日長蛇の列をなすケ・ブランリー美術館のようなダイナミックな迫力、あるいはパリ市内に数多く存在するいわゆる観光名所的な美術館のモニュメンタルで強烈な印象はない。しかし、訪れる人々が思い思いの時間を過ごせる、ゆるくて生き生きとした自由な空間がある。

散歩の途中でふらりと併設の本屋（かなり偏りはあるが、独自の視点で本を揃えていて結構面白い）に立ち寄って周りを見渡せば、階下に見下ろすカフェでは学生風の若者が本を読みふけり、隣のレストランでは早めのアペリティフを楽しむ人々が会話に興じている。展示スペースの一角では次回の展覧会に向けて作品の設営が行われ、それを訪れた人々が覗き込み、奥では参加型の作品の中で子供たちが跳ね回っている。そうかと思えばただのんびりとひなたぼっこをしているだけ、なんて人だっている。パレ・ド・トーキョーは、何と云うかパリの街角の風景が自然に集まってきたような、およそ今まで私たちが知っている「美術館」らしくない場所なのである。

広場をつくる

パレ・ド・トーキョーの改修において、ラカトン&ヴァッサルは新たに加える要素を最小限に抑え、空間が元々持つポテンシャルを最大限に活用した。仕切りのない大空間、およそ8mもの天井高、自然光がふんだんに降り注ぐトップライト。以前に行われた内装、設備の解体工事によって図らずも確保された透明性をそのまま利用したのだ。初めてこの場所を訪れた時、仕上げだけを見ればまるで倉庫のような印象に驚いたものだが、良く観察すると空間を抑えて余白を残した建築家の意図が読み取れる。

ラカトン&ヴァッサルが作る建築の特徴は、建物の

竣工が「作品」の完成ではなく、そこで人々が活動し、勝手様々な生活の要素が持ち込まれることで、さらに生き生きとした空間が現れてくる、ということにある。彼らの建築には、強い造形性や作り込んだ仕掛けはない。あくまでシンプルで、カジュアルで、軽やかで、明るい。しかし不思議に端正で、むしろ詩的な印象すら与える。その絶妙なバランスが彼らの建築の醍醐味であり、フランスのみならずヨーロッパの若手建築家や学生たちから大きな支持を得ている理由だろう。

彼らは、パレ・ド・トーキョーの改修計画を提案するにあたり「広場」というイメージを提案した。すなわち、ニュートラルな大空間でイベントが発生しては消え、人やモノの動きと密度が常に変化していく舞台をつくることを目指したのである。だから、パレ・ド・トーキョーを訪れると、見せる側と見る側という一方通行の関係ではなく、皆がパレ・ド・トーキョーという広場を構成する要素になる。乱暴なことを言ってしまうと、ここへ来たら展覧会なんか見なくて好きに過ごせばいいのだ。パレ・ド・トーキョーは、皆が参加できるアートの実験と創造の場なのである。



© Philippe Rusoff

Anne Lacaton Jean-Philippe Vassal



Text: MIHO NAGASHIMA



© Philippe Rusoff



「BEFORE (PLUS IN MOINS)」展 MAY 24-JULY 25 2007
Andy Warhol, *Electric Chairs*, 1971 / Collection Frac
Nord-Pas de Calais. Photo: © Galerie D. Terplon.



「BASTARD CREATURE」展 MAY 24-JULY 25 2007
Barks Violette, *Kill Yourself (Twin)*, 2006 / Courtesy
Collection Migros Museum für Gegenwartskunst
Zürich, photo: A. Burger, Zürich.



「BASTARD CREATURE」展 MAY 24-JULY 25 2007
Michel Livrine, *Courtney Love Kneeling*,
1994 / Courtesy of the Artist.



MARQUE NOIRE

黒標—スティーブン・バリノに捧ぐ

Text_AKIKO MIKI



「STEVEN PARRINO RETROSPECTIVE 1981-2004」
MAY 24-AUG 26, 2007

(上) Steven Parrino, exhibition view, CAN, Neuchâtel, 1998. Photo: Joël Van Allmen.
(右) Performance by Steven Parrino Electrophilia with Jutta Koether, Black Bonds
exhibition, Swiss Institute - Contemporary Art, New York 2002.



昨年、新館長が着任したバレ・ド・トーキョーでは、彼の指揮によるプログラムラインが9月より始まった。その第一章「50 億年」は、「伸縮性」をテーマに長い時間や偶発性の問題を扱い、第二章「M / 反転した世界からのニュース」は、対立する極の間の振動に照準を合せ複数の個展・グループ展で構成されたが、今回はプログラム全体をスティーブン・バリノという一人のアーティストに捧げている。

2005 年 1 月元旦、NY ブルックリン橋でバイク事故による衝撃的な死を遂げたバリノの活動は国際的にはあまり知られていない。だが、その革新的な絵画表現の追求、特に異分野やメディアへの積極的な取り組みや、カテゴリー / 社会規範 / ヒエラルキーを超越し、コラボレーションのプロセスを制作の核として多くの新旧異なる才能と関わることで創造活動を発展させていった点などから、彼の死後、改めて注目を集めるようになっていく。

70 年代末 / 80 年代初頭の「絵画は終わった」という巷の空気のなかで、バリノの選んだ絵画の取り組みは、その後台頭してくることになる超表現主義的な方向等とは一線を画すもので、それは、ときに「絵画の死とともに生きる」と喩えられるような、絵画の破壊とモダンアートの歴史 / アメリカンポップ文化からのアプロプリエーションの戦略によって、前衛ナレティブの

歴史的な断絶を再生しようとする試みだった。

歪められ、破られたキャンバス地が、壁に立て掛けられたり床に積まれたりして異様なフォルムを呈したバリノの絵画。エンジンオイルや工業エナメルペイント（ジャッドの使用した有名なハーレーダヴィッドソン用の塗料とか）、血などの媒体も用いられ、多くは壊れた事故車や工事現場に残された廃材、踏み捨てられたチューイングガムのよう。ある動作・エネルギーの視覚的な具現化を目指して、作家はパフォーマンスベースでの制作も頻繁に行った。一方、デッサン、コラージュ作品では、ラモーンズのパンクロック、ノーウエーブ、ヘルズエンジェルなどのモチーフの直接的な引用が目立つ。ユッタ・コッターとともに「Electrophilia」名で音楽活動をしていたことから、レイモン・ベティボンとの関係を想起させないが、バリノの世界は、より悪趣味でアンダーなアメリカ社会・文化に根差している。

本プログラムは三部構成で、1981 年—2004 年に制作されたバリノの代表作約百点を集めた回顧展を中心に、「BEFORE (PLUS OU MOINS)」と「BASTARD CREATURE」という二つの展覧会も同時に開催。前者は、バリノに影響を与えたアーティストたちの作品を通して、バリノ芸術、美学の起源を探るもので、ウォーホルの電気椅子やステラのブラックペインティ

ング、アコンチが地下室でバットを振り回す異常に凶暴なパフォーマンスビデオから、スミソンの初期のレアな彫刻作品、さらにはケネス・アンガーの悪魔信仰にまつわる映画「Invocation of My Demon Brother」等の歴史的作品をフィーチャー。ちなみに、本映画のオリジナルサウンドはミック・ジャガーによるが、ここでは「Electrophilia」が本映画のために特別に作ったサウンドが代わりに流される。まるで、「ルシファー・ライジング」のジミー・ペイジの音楽がボビー・ボーソレイユの獄中録音音楽に代わった有名なエピソードをなぞるかのよう。

もう一方の企画は、バリノの他作家との積極的な共同制作や若手作家へのサポート、交流活動に注目し、生前に彼自身が企画した二展を再構成したもの。暴力、セックス、アンダーグラウンド、アウトロー、ポップ・カルチャー等のエッセンスの凝縮されたマイケル・ラヴィーン、エイミー・グラナット、バンクス・パイオレット、マイ・チュ・ベレ、リチャード・カーンらの作品を通して、バリノが信じ、そして彼がこれらのアーティストたちの活動に見ようとした、文化の極限を探し求める姿勢とアートのラディカルな可能性について考える。なお、これら展覧会だけでなく、Cinema Zero、ピーター・サヴィル、メルツパウラの講演、ライブといった関連イベントも予定。

KOKI TANAKA

田中功起

Setting  and Taking Down and more



「Setting Up and Taking Down / 立てることと倒すこと」展示風景
モジュール、バレ・ド・トーキョー、パリ、フランス（2007年3月1日から4月1日）



KOKI TANAKA, Underground of Palais de Tokyo 2007 type-c print
dimension variable

ばくがバレのスタディ・プログラムにいたときはちょうどディレクター交替の時期でした。ジェロームとニコラのあとを受けてマーク・オリヴィエになり、ディレクションが大きく変わりました。以前のバレが間諜だったとすると、いっぺんポタージュ・スूपになった印象です。雑多で狼狽でなにが飛び出すかわからないカオスのようなアートセンターが、整然となり、ロゴもドット・フォントから、ゴシック体のきっちりしたものに変ったりして。とはいえそのポタージュの底には彼の一贯したコンセプト（作品とはピースとして結実したものとはかぎらないし、かならずしもアーティストが作ったものだけがアートであるわけでもない）が隠れているわけですけど。

ばくはモジュールという若手を紹介するスペースで個展をしたのですが、そこではバレのなかからいくつかの家具（テーブルとかソファとか扉とか）や備品（段ボールとか脚立とかゴミ箱とか）を展示スペースに持ち込み、それを立てて、ボーリングのボールで倒す、という一連のアクションを映像とともにインスタレーションしました。つまり結果（インスタレーション）だけが完結した作品というわけでもなく、かといって過程（映像）だけが作品というわけでもなく、その行為（パフォーマンス）が作品というわけでもなく、つねにどこかが欠けている状態が提示・維持されている、というものです。

一年前のスタディ・プログラム（「Le Pavillon」という名称）のなかではウシュアニア（アルゼンチン）で氷河を鑑賞し、ニヘアとの共同プロジェクトのため工場見学をし（試供品をたくさんもらい）、本を作るプロジェクトのためにベルギーの印刷屋さんと打ち合わせをし（予算的にできないと言われ）、坊主頭に角をつけてトーク・ショウをするはめになったりしました。そこではコラボレーションをベースにいかにか経験を拡張するかということに焦点がおかれ、いやおうなくばくの感覚は開かれたように思います。おまけとしてはポーランドの山奥で7時間もさまようなんてことも経験しました。

1975年生まれ。04年アジア・カルチュラル・カウンシルの助成によりロケーション・ワンに参加。ニューヨークに滞在。05年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。05-06年ポーランド美術振興財団の助成およびフランス政府給費留学生としてパヴィリオン（バレ・ド・トーキョー）に参加、パリに滞在。先頃、初作品集を上梓。



写真は上から、プログラム参加アーティストのWagner Moralesとの撮影、エール・カラワチ（アルゼンチン）で見えた氷河、ウシュアニア（アルゼンチン）で「Koki Tanaka Show」撮影中（Wagner MoralesとRamon Sosa）、バレの中心でPavillonのアーティストたち、
[Le Pavillon]の正式名称はLe Pavillon, art research laboratory of the Palais de Tokyo, Paris.

パリ万博に建てられた Palais de Tokyo、1937 年
アートセンターになった Palais de Tokyo、2001 年
magic village があらわれた Palais de Tokyo、2004 年

日のあるとき

すべての空間に光が差し込む Palais de Tokyo
その光はいつもと同じところからやってきて
同じ窓と天窗を通じ同じ壁に当たって反射する
記憶の重なり光が屈折して輝く
静かに magic village があらわれた



magic village
pyramid tent, rope, fir wood, plastic plants, cotton sheet
dimensions variable
Installation view, Palais de Tokyo, Paris, 2004

天井から注ぐ天然光。
雲の移りとともに光りの動きの様も見える。
そんな視線の先の目の前を、
どこからともなく入り込んできた鳥が
自由に横切っていったりする。

ライトグレー、イエローグリーン、パープル、
ホワイト、それぞれ単一の色にわたる、
4つの景色にあらわれた magic village。
展示には2つの構成を持った。

その村の住人たちが佇む風景と、
誰ひとりいない村の光景。
誰が残していったのか、静かにそこに置かれた景色に、
永遠といわんばかりの光が映った。



magic village
pyramid tent, rope, fir wood, plastic plants, cotton sheet, dimensions variable
Installation view, Palais de Tokyo, Paris, 2004



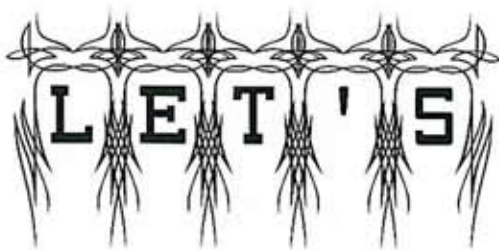
magic village
pyramid tent, rope, fir wood, plastic plants, cotton sheet, dimensions variable
Installation view, Palais de Tokyo, Paris, 2004



magic village, 2004
ink on paper text and drawing

COSMIC WONDERとは、単独での作品制作を平行するアーティスト Yukinori Maeda による、定額または不定期によるプロジェクト名。(1998年から2006年までの間、発表された COSMIC WONDER による計19作品のうち、パレドトーキョーでの2作品を含む15作品をパリにて発表。)作品はインスタレーションとパフォーマンスによるもので、立体、図、映像、音楽等、それぞれの要素が平等に交わり最終的に一つのイメージを構成。(なお、2007年より、これら一連の COSMIC WONDER としての活動領域より独立し、具体的に空間表現を追求するファッションプロジェクトとして COSMIC WONDER Light Source が誕生。)

COSMIC WONDER
コスミックワンダー
magic village A.T. Palais de Tokyo



LET'S ENJOY

Text & Photography TOMOMI KURISU



Black Block プティック

Tél +33 1 47 23 37 04
www.blackblock.org Contact : blackblock@free.fr

昨年青山にオープンした会員制クラブ le Baron de Paris のオーナー、アンドレがパリで初めてプロデュースしたのがパレ・ド・トーキョー内の Black Block。彼はグラフィティアーティストとしてパリ中の壁を席巻したのち、プティックやクラブ、ホテル経営にも乗り出すなど、今やパリのハイブなカルチャーシーンで欠かすことのできない存在となった。

デザインからコンセプトまで全てを手がけた Black Block で売られているものは、本人が世界中から集めたものと、アンドレグッズ、そしてアーティストの限定プロダクト。バッグからTシャツ、スニーカー、CD、バッジなど、ここに来ないと買えない一点もの、限定ものばかり。それらのおもちゃが、冷蔵庫のよう



なショーケースに上品に置かれている。大きな壁面と中央の台では Black Block 主催のミニ展覧会が行われる。多忙な今でもアンドレはパリにいれば必ず立ち寄るといふ。

パレ・ド・トーキョーが既成のアートに限定しない、ジャンルを超えた新しいアートを提示する空間であるとすれば、まさにプティックの経営者としてアンドレを採用したのは正解。本人のみならず扱っている商品のどれもが、アート、音楽、ファッション、デザインに限定されないハイブリッドな活動をしている面々だからだ。ここにくればパリのカルチャーシーンの匂が目瞭然。0時までオープンしているので近所の本家 le Baron に行く前にチェックしたい。



Tokyo Eat レストラン

Tél +33 1 47 20 00 29

現代アートの展示を見た後、古き良きパリのビストロではなくてもうちょっとアートな余韻に浸りたいなら、併設のレストラン・バー、Tokyo Eat へ。広々とした空間に、イヴァン・ファイヤードの丸テーブル、アンドレ、ゼウス、コルコズなど、デザイナー、グラフィティアーティストがデザインしたポップな椅子が並ぶ。ピンクとブルーのUFOみたいな巨大ランプと2人でも利用できる(!)遊び心満載のトイレは建築家ステファン・モーバンの設計。

オープンキッチンの奥でシェフのティエリー・バッサン氏が作る料理は、牛ホホ肉のポトフやタルタル、子羊のローストなど伝統的ビストロ料理だけでなく、スパイスや珍しい野菜をアクセントにした創作フレン

チも。旬の野菜をふんだんにとり入れた料理が楽しめる。アペリティフから前菜、メイン、デザート、コーヒーまでメニューは豊富だが、もちろん単品でもオーダーできる。ランチは12時から15時、ディナーは20時から23時30時まで、バーの利用は1時まで。美術館併設のレストランでこんなに遅くまで営業しているところも珍しい。

天井が高く開放的で落ち着いた空間なので昼のビジネスランチなどにも利用されているが、ディナータイムになると中2階のユーモアたっぷりのトイレの奥にDJが入る。夏はセーヌ川が見えるテラスでの食事もある。ここなら、のんびりと美術館鑑賞をした後においしい食事を堪能し、楽しく一日を締めくくれるだろう。





La librairie 本屋

Tél : +33 1 49 52 02 04
laibrairie@palaisdetokyo.com

フランス人にとって画期的な本屋がパレ・ド・トーキョー入口の鉄格子に囲まれた La librairie。なぜ画期的なのか。それは夜中0時まで営業しているということ、そして雑誌と本の両方を販売しているということだ。フランスの小売店は19時には閉店するし、雑誌は雑誌屋、本は本屋とわかれており「ついでに雑誌も」という買い方ができない。さらに150種類のフランス内外のアート、モード、建築、デザインの雑誌の品揃えはさすがの雑誌屋でも実現不可能。もちろんアート、評論、美学、写真、建築、デザインなどの専門書も充実している。この小さな空間で、紙媒体以外にもインディーズレーベルのCDだとかアーティストが製作する限定DVD、ちょっとしたプレゼント

などに最適な雑貨類も所狭しと置かれている。

こだわりは、今のカルチャーシーンがすぐキャッチできるセレクト。なかでも話題のアーティストの作品集や評論集もパッと目につく場所に置いてあるし、表紙をずらりと並べた雑誌コーナーにも目を奪われる。店内を一周するだけでパリの今がだいたい把握できてしまう。気になったらバラバラと立ち読みしてもいいし、欲しいと思ったら購入してもいい。買い物をするとパレ・ド・トーキョーの初代デザイナー M/M paris によるビクセルアートの袋に入れてくれる。遅くまでやっているの、友達の前で、今夜のパーティーの音楽や寝る前に読む本探しと利用価値大の本屋なのだ。



Tokyo Idem カフェ

Tél. +33 1 47 20 00 09

パリのカフェで困るのがギャルソンのペースで注文、支払いをしなくてはならないこと。忙しい時間はかなり待たされてイライラしてしまう。でもパレ・ド・トーキョーのカフェ Tokyo Idem はセルフサービスなので急いでも時間がある時も好きなだけ休める。フランス語が全然ダメでも心配ない。やり方は万国共通。食堂式でお盆に好きな物を乗せてレジでお金を払うだけ。メニューはサラダやデザート、サンドウィッチ、コーヒー、ジュースなどの軽食。熱い飲み物はレジの人に言うとその場で出してくれる。ネクターといって、砂糖が入っているがいちごやあんずなど日本では珍しい味のジュースもある。夜遅く一杯やりたいときにはビールなんかもある。



セルフサービスなので空いている席に座ればいい。食堂っぽい雰囲気のある大きなテーブルとベンチや窓際のデッキチェアのような椅子などいろいろ。テレビが置いてあり、展示内容やイベントの告知をチェックするもよし。おすすめは階段を降りてすぐの椅子。壁にもたれて座れば向かいのパリ市近代美術館のクラシックな建物前でスケボーの練習をする若者を観察できる。夏場はテラスを開放しているのでセーヌ川をみながら気持ちよく一休みも可。本を持ち込んでコーヒー一杯でのんびりと読書をしているフランス人もいれば、話に熱中しているカップルもいる。美術館併設のカフェというより、自分の家のように気軽に利用できるのがこのカフェの特色なのかもしれない。

